

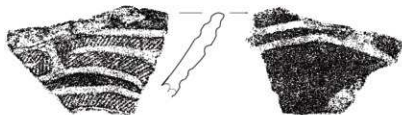
# 栃木県栃木市中根八幡遺跡

## 第1次発掘調査概要報告

ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION OF THE NAKANEHACHIMAN SITE

ring-shaped earthen mound Jomon site,

Tochigi city; the first season short report.



中根八幡遺跡学術発掘調査団

Nakanehachiman Research Project

奈良大学・國學院大學栃木短期大学

Nara University and Kokugakuin Tochigi Junior College

# 栃木県栃木市中根八幡遺跡

## 第1次発掘調査概要報告

中根八幡遺跡学術発掘調査団

### 1. 調査の目的

数千年に及ぶ狩猟採集社会から新たな農耕社会へと移行するにあたり、日本列島の各所において様々な変化が知られてきた。このうち、関東平野を横断する利根川を境として、北側では弥生時代前期には水田稲作を行わず、居住痕跡も乏しい一方、再葬墓に代表される精神文化に関わる遺構・遺物が目立っている。

そもそも、早期の燃糸土器以来、諸磯式、勝坂式・阿玉台式、加曾利E式、称名寺式、堀之内式、加曾利B式など関東地方は縄文土器様式の一大拠点として存在してきたが、安行3d式を最後として、晩期後葉には中部地方を中心とした浮線土器と、東北地方の亀ヶ岡式土器の分布圏に入ることとなり、それまでの独自性を大きく変容させる。近年の研究により、この時期にはアワ・ヒエなどの雑穀栽培が東日本にも導入されることがわかっている。

こうした一大変革期の直前まで、東関東を中心とした集落において特徴的に構築・利用されたのが「環状盛土遺構」である。意図的な盛土行為を積極的に評価する説（小林<sub>9</sub>1996）と、長期間の居住による結果的な累積と見る説（阿部1996）の対立的構図が知られてきたが、その後の類似遺構のみならず集落立地や廃棄帯などを含めた調査研究の進展とともに、時期や地域によって異なる様々な状況などが指摘されてきた。栃木県南部には、環状盛土遺構研究の端緒となった寺野東遺跡が所在するものの、その後の調査研究は下総台地（佐倉市井野長割遺跡、曲輪ノ内貝塚、君津市三直貝塚など）や大宮台地（馬場小室山遺跡、雅楽谷遺跡など）が中心となってきた（堀越1995、江原1999、阿部2005、佐倉市教育委員会編2004・2015、馬場小室山遺跡研究会2007、川島2015ほか）。

調査団の一人である小林はこれまで縄文時代晩期後半から弥生時代中期までの集落遺跡の調査研究を実施してきた（小林<sub>9</sub>2004など）。この過程で、縄文時代晩期後半段階の社会の集落は小規模かつ分散化傾向が顕著であり、そこにいたる経緯が課題として浮上してきた。また、同じく調査団の中村は、儀礼用土器や墓制などから地域間関係を検討してきたが（中村2013）、晩期前半を境とした大きな変化を整理する必要性を感じていた。

こうした中、上記の研究課題に対処すべく、栃木県南部の後・晩期社会の問題を共同で研究することとなった。その具体的な調査地として選んだのが栃木市藤岡町の中根八幡遺跡である。旧藤岡町には、寺野東遺跡と並ぶ県南部の代表的な後晩期遺跡である藤岡神社遺跡が所在するほか、詳細な調査記録が公表されていないものの、土偶や石剣研究で著名な後藤遺跡が知られていた。南側には、安行3c式の標識遺跡として知られる群馬板倉遺跡や、近年の環状盛土遺構の調査で注目された埼玉県長竹遺跡などが所在する。中根八幡遺跡は、後藤遺跡とともに『藤岡町史』において環状盛土遺構である可能性が指摘され、一部研究者に注目されていたものの、具体的な発掘調査は行われてこなかった。現地は畑地と宅地であるが、環状にめぐる盛土が

よく遺存しており、その実態解明と遺跡保護のための基礎資料を得ることを目的に、両大学の教員・学生による調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区自治会の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。(中村)

## 2. 調査・整理の経過

### (1) 発掘調査

8月9日(日)晴 國學院大學栃木短期大学より機材搬入後、調査区の草刈りをして整地した。午後は三等三角点(21.43m)から原点移動し、ベンチマークを設定。続いて盛土の等高線を引く準備として20cm間隔で串打ちを行なった。

8月10日(月)晴 午前中は前日の串打ちをもとに、平板を用いて等高線を引いた。午後には、奈良大学チームが合流し、発掘区(5m×1m)の設定を行った。

8月11日(火)晴 測量班は引き続き平板で等高線を引く作業を行なった。発掘班は遺跡全体の表探を行ない土器や黒曜石などを採集。午後はトレンチを設定し表土剥ぎに取りかかった。小林はトータルステーションを用いて境内平面の作成を開始する。

8月12日(水)晴れ 測量班は引き続き平板で等高線を引く。午後は環状盛土の東西断面図の作成のためのレベルングを行なった。境内の池の端から、東のクリ畑の端までを概ね2mごとに高さを計測した。発掘班はトレンチ内を掘り下げた。表土の下は50cm幅で、A1～A3のみを掘り進めることとし、表土下の遺物は10cmの人工層位で、グリットごとに取り上げることとした。表土中から既に、土器以外にも石皿、すり石、耳飾り、石鏃などが出土し、期待が高まったが、意外にも笹の根に苦戦し、掘り下げスピードがあがらなかった。このため、盛土の立ち上がり状況を確認するため、新たにトレンチ(A7)を設定し、掘り進めた。

8月13日(木)晴れ 測量班は、発掘区南側の盛土の等高線を引く作業に移る。発掘班はトレンチ内の掘り下げ。A7は地山層まで到達。小島正明氏より、西隣の盛土直上の宅地・畑地より採集した遺物の寄贈を受ける。

8月14日(金)晴れ 測量班は引き続き平板で南側の等高線を引く作業を行ない、図面を完成させる。発掘班はトレンチ内の掘り下げを継続するが、今年度は1.4mまで掘り下げを中断。午後より北面の土層断面図を作成した。写真撮影の後、埋め戻しをして発掘調査終了。発掘期間中は晴天に恵まれたが、撤収中より大雨となった。

### (2) 整理作業

整理作業は、表面採集資料とA1・A2出土品を奈良大学、A3～A7出土品を國學院大學栃木短期大学が分担し進めた。國學院大學栃木短期大学では、後期授業開始とともに、毎週火曜日に考古学演習や考古学フィールドワークの授業の一環として、また放課後を利用し整理作業を開始。特に、12月23～25日には補講期間を利用して集中的に作業を行う。本稿では、その一部を図示した。奈良大学でも、10月19日から毎週月・火曜日の放課後を利用して、整理作業を行った。また、1月6日より概報作成のため、拓本と実測を開始した。

(高垣)

### 3. 調査区と土層

#### (1) 遺跡の位置と概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する（第1図a）。現在の遊水地堤防との距離は、盛土最南端から約100mである。遺跡の東側に広がる畑地の中央が最も低くなっており、現在観音堂が所在している（中世の如来像が安置されている）。その周囲、部分的に切除されている部分があるものの、直径約160mにわたって、ほぼ環状に盛り上がりが確認できる（第1図b）。北西の盛土部分を境に、西側は一段低くなっており、ここに中根八幡神社が鎮座する。さらにその南側（遺跡の南西側）はさらに低く湧水を起源とする池が整備されている。盛土はこの池にむかってC字形に開口している可能性もあるが、笹が繁茂しており現地地形を十分確認できていない。この池と観音堂を結んだ直線の簡易的なエレベーション図を作成した（第1図b下）。（中村）

#### (2) A1～A3グリッド

今年度の発掘区は、北西部分の盛土上（神社境内地）に、概ね東西方向に、長さ5m、幅1mで設定し、西側から順にA1～A5グリッドと名付けた。この部分の表土を除去した後、A1～A3を幅50cmで掘削した。表土下の遺物は、10cmごとの人工層位でグリッド別に取り上げた。

基本層序は上から順に、黒色土（表土、しまり弱い）、茶褐色土（盛土、しまりやや弱い）、黄色土（地山、しまりやや弱い）である。これらの土層は、斜面に沿って傾斜していく。

遺物は表土からも多く出土しており、2層までは遺物が多く状況が続く。地山との境界付近から遺物が全く見られなかった。また、各層とも複数の時期の土器片が含まれていることが観察できた。（桃井・松尾）

#### (3) A7グリッド

A1～A5グリッドの延長線上に1m隔てて1m×1.5mの調査区を設定し、A7グリッドとした。盛土端部付近における土層堆積の検討を優先するため、遺物は一括して取り上げた。

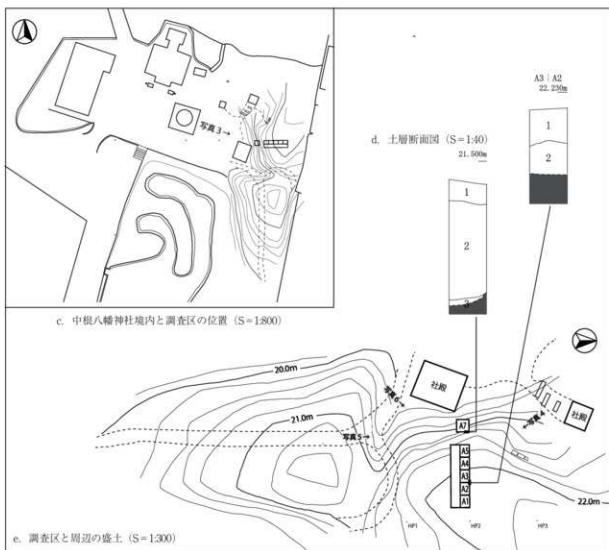
基本層序は上から順に、黒色土（表土、しまり弱い）、茶褐色土（盛土、しまりやや弱い）、黄色土（地山、しまりやや強い）である。これらの土層は、斜面に沿って傾斜していく。

遺物は表土からも多く出土しており、表採するだけでも多くの遺物が採集できる程である。2層までは遺物が多く出土する状況が続く。地山との境界約10cm上面付近から遺物が全く見られない状態であった。また、各層とも複数の時期の土器片が含まれていることが観察できた。（岩永）



a. 中根八幡遺跡の位置

b. 中根八幡遺跡全体図 (藤岡町史) と環状盛土断面図



c. 中根八幡神社境内と調査区の位置 (S=1:800)

d. 土層断面図 (S=1:40)  
21.500m

e. 調査区と周辺の盛土 (S=1:300)

第1図 中根八幡遺跡の位置と調査区

#### 4. 出土遺物

##### (1) A1・A2グリッド

###### ①土器

A1・A2出土の土器は、中期の土器を少量含み、後期後半を多く有する特徴がある。そして、これに晩期前半から晩期中業段階をわずかに含む。総じて土器の破片は小片が多い。

典型的なものをいくつか挙げると、まず1は阿玉台式土器であり、口縁部の突起部分破片である。2から7は、安行2式を中心とする粗製深鉢である。8は楡付土器第IV段階に類似する深鉢口縁部破片と考えられ、凸状の波状口縁端部に刻みと下部に三叉文をもつ。9は、安行3d式土器の体部片であり、文様は浅く細い沈線をなし、安行3d式でも最も新しい段階の様相を呈する。10は大洞C2式の浅鉢口縁部の破片で、内面に太めの沈線を有する。口縁端部は素口縁をなす。外面の文様は、太めの縄文を施した工字文をもち、大洞C2式でも新しい様相を呈する。

###### ②石器

石器は、ごく一部を石鏃(12)や剥片石器(13)、石皿などが出土している。

###### ③土製品

土製品では、耳飾りが出土している。図示していないが、耳栓であり、無孔のI<sub>2</sub>A<sub>1</sub>類と考えられる(設楽1983)。

###### ④動物遺存体

その他、A1・A2からは、動物遺存体が出土しており、イノシシの右第3手根骨の破片が出土している<sup>1)</sup>。

(桃井・岩永・松尾)

##### (2) A3グリッド

出土遺物の分析は未着手だが、特徴的な同一個体と思われる破片が複数出土していることで提示する。11a～gは、キザミの入った隆帯を持つ薄手の安行2式土器の胴部破片である。当初一個体と考えたが、a～dは、隆帯による楕円区画や、円盤状の貼瘤などの特徴から注口土器、f・gは、三角の区画やキザミのある貼瘤や貫通孔、胴下半部に施された縄文などから、波状口縁深鉢の可能性もある。いずれも砂粒を多く含む。なお、eの破片は上下逆の可能性もある。

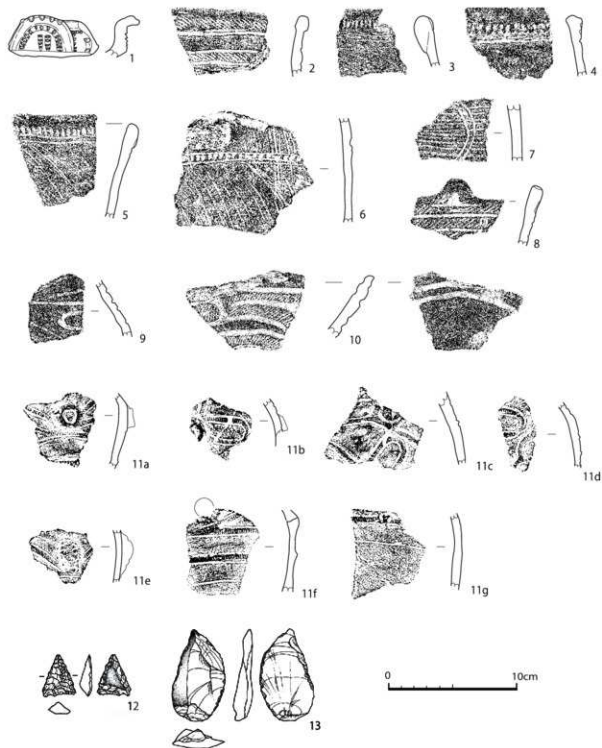
(伊沢)

##### (3) A7グリッド

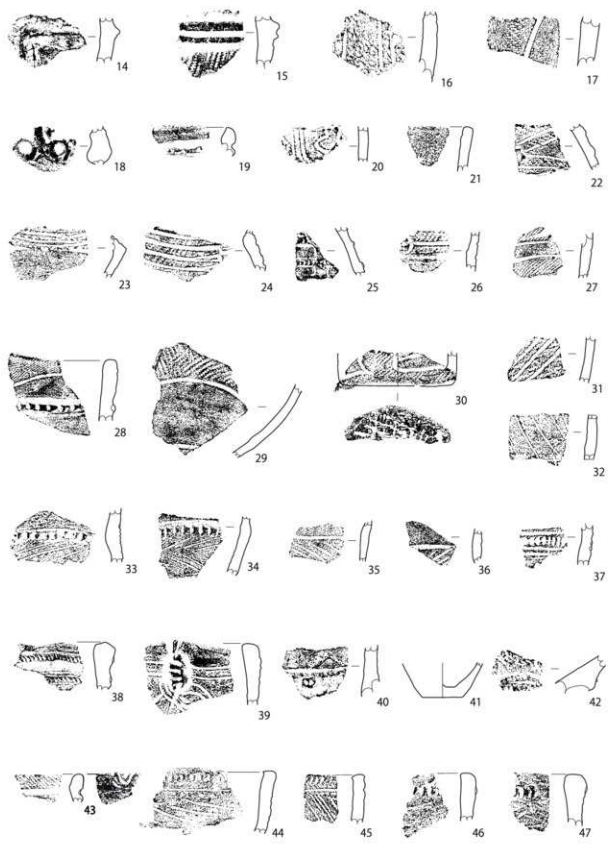
盛土の端とはいえ、表土から地山まで掘りあげたため、利用時期の概要を示すことができるものと考え、優先して図化作業を進め、比較的時期判別が容易なものを中心に1ページ分を図示した。

14～18は中期の土器である。14は阿玉台式、15は加曾利E1式、16は同2式、17は同3式。隣接地での採集資料には勝坂式・曾利式も認められた。

19以降は後期の土器である。19・20は堀之内1式、21は同2式である。22～25は堀之内2式の注口土器であろう。26～37は加曾利B式～曾谷式並行期の土器であり、本グリッドでは最も数が多い。28・29は磨消縄文を持つ精製土器。30は東北の下部単孔土器などに多い筒形の形態と磨消縄文による曲線文を持つ。31～42は粗製土器である。31は縄文地に斜沈線を施す。33～36は羽状沈線文系で本グリッドでは主体を占める。38～47は後期安行式である。42は台付土器の底部で、刻み隆帯を巡らせている。44～47は附点



第2図 A1・A2・A3トレンチ出土遺物 土器(1/3)・石器(1/3)



第3図 A7トレンチ出土遺物



紐線文土器（条線文土器）である。本グリッドには明確に晩期と判断できる土器は認められなかった。石器は、若干の剥片が出土しているのみである。（中村）

## 5. まとめと課題

### (1) 遺跡全体の構造

調査前の踏査と一部の測定の結果、現状で盛土の直径は約160mにわたっており、所々削平などにより不明な箇所があるものの、ほぼ環状に盛り上がりを確認できた。なお、盛土よりも下部の状態を一部確認したA7グリッドでは、中期の土器が含まれており、盛土下に中期の集落が存在する可能性が指摘できる。

### (2) 湧水地点・池

遺跡の南西側には、まわりよりも低い地点があり、そこには湧水を起源とする池が整備されている。池に湧き出る水の量は多く、かつては、この池から西側にかけて水路がひかれ、水田が西側に広がっていたという。おそらく、この湧水を起点とする縄文時代の水場遺構が存在する可能性が非常に高い。現地での所見では、盛土はこの池にむかってC字形に開口している可能性がある。こうした水場と環状盛土のセット関係からなる環状盛土の景観は、他の遺跡でも類似している。今後は、池部分の検討をどのように進めるべきか考える必要があるだろう。

### (3) 盛土の堆積状況

調査を実施した神社境内に残存する盛土部には、グリッドを設定し、盛土上部と下部の2箇所を掘り下げた。その結果、上部のA1・A2グリッドでは2層以下が人工的な盛土と考えられ、下部のA7グリッドでは最下部で地山（ローム層）が検出し、その上にローム質土を中心とする人工的な堆積層を確認できた。表土を除き、縄文時代以降の遺物の混入はなく、今回調査を実施した地点の盛り土としていたものは、調査によって人工的に堆積した盛り土であることが確定できたことになる。

### (4) 盛土の出土遺物

A1・A2グリッドから出土した遺物は、土器、石器、土製品、動物遺存体である。A1・A2グリッドでは上層から出土する土器は、小片が集中的に出土し、複数の土器型式が混在しており、再堆積の状態を呈している。また、今回の地点では、後期後半段階の土器の出土量が多く、概ね後期後半段階に集中的に構築された可能性を示している。今回の調査で注目すべきであるのは、盛土上部のA1・A2グリッドにおいて、晩期中葉の大洞C2式古段階の土器が出土し、この段階に盛土が終焉を迎えることが判明した。これまでも、当該時期に環状盛土遺構が終焉を迎えることが指摘されていたが、改めて10の土器の型式を確認すると、中根八幡遺跡では大洞C2式での新しい段階で、おそらくともいわれる大洞A式移行期直前ころまでに特定できる可能性がある。本遺跡からは、同時に安行3d式でも最も新しい段階の土器も出土しており(9)、これらは併行する同一時期であろう。

### (5) 今後の展望

こうした中根八幡遺跡で判明した盛土終焉時期は、冒頭で予測したように、近年、東日本でも確認されは

じめたアワ・キビ農耕と大きく関わるのは明らかである。アワ・キビ農耕、いまのところ浮線土器出現期以降であり、今回の環状盛土遺構の終焉時期直後に相当する。現在まで、安行段階でのアワ・キビ農耕の証拠は、全く発見されておらず、生業の大転換は、安行式文化の終焉時期、すなわち、浮線土器出現直前期に生じている可能性がよりいっそう高まったことになる。今回の発掘調査によって、こうした点について新情報を提供することができたことは大きな成果といつてよいであろう。(小林)

#### 調査・整理参加者

奈良大学：桃井飛鳥（大学院修士2年）岩永祐貴 松尾菜津子（学部4年）木ノ内暎（学部3年）新井優哉  
栗野翔太 安楽可奈子 税田脩介 杉浦正和 鈴木郁哉 富樫有里 中原七菜子 中村優太 東直輝  
松岡奏 三井淳 三宅良宜 米田拓海（学部1年）小林青樹（教授）

國學院大學栃木短期大学：相田祐亮 伊沢加奈子 磯崎友里恵 稲葉大輝 遠藤友美 大柿湖紀 大島可奈子  
恩田あかり 金子弘美 熊倉暎音 齋藤義人 坂本梢 中川優太 平塚祐美 前川琴美 宮下茜 梁  
瀬奈希 依田健 和田千奈 渡邊絵生子（学部2年）大谷舞菜 篠原大輝 菅田孝健 田辺理奈 飛田  
彩哉子（学部1年）伏見和也（卒業生）高垣美菜子（学芸員）岸美知子（助手）中村耕作（専任講師）

#### 調査協力者

中根地区自治会 中根八幡神社 栃木市教育委員会 栃木県教育委員会 栃木市藤岡歴史民俗資料館  
熊倉教裕 小島正明 大出光一 尾島忠信 高見哲士 小澤美和子 酒寄雅志 白山実 坂本勝雄 石塚  
孝市 福富善明 初山孝行 江原英 江原美奈子 野口静雄 鈴木正博 鈴木加津子 齋藤弘道 藤由美  
藤俊夫 鴨志田華司 細田勝 吉田稔 古谷涉 小倉和重 大河原務 田中大介 宮内信雄 宮田圭祐  
曾我真実子 岡山亮子 加藤大二郎 長谷川陽

#### 本概要報告執筆者

小林青樹・中村耕作・桃井飛鳥・岩永祐貴・松尾菜津子・伊沢加奈子・高垣美菜子

#### 註

- 1) 動物遺存体の同定については、田中香里氏（奈良大学大学院）が行い、松崎哲也氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）の教示を受けた。両氏に感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 阿部芳部 1996 「縄文時代のムラと盛土遺構」『歴史手帖』第24巻第8号  
阿部芳部 2005 「『盛土遺構』と 道丘集落 - 発見の時代から検証の段階へ -」『考古学集刊』創刊号  
新屋雅明 2008 「晩期安行式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション  
岩淵一夫・手塚達弥 2003 「縄文時代」『藤岡町史 資料編考古』藤岡町  
江原 英 1997 『寺野東遺跡Ⅴ（縄文時代環状盛土遺構・水場の遺構編-1）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団  
江原 英 1999 「寺野東遺跡環状盛土遺構の類型-縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業-」『栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』第7号

- 小川卓也・宮田忠洋・向井博之 2015「北関東における後期注口土器の様相」『第28回縄文セミナー 縄文後期注口土器の諸様相』  
縄文セミナーの会
- 川島高宗 2015『生産と宴からみた縄文時代の社会的複雑化』六一書房
- 小林青樹 2004『農耕社会開始期の居住システムと住居構造』『帝京大学山梨文化財研究報告』第12集
- 小林達雄 1996『縄文人の世界』朝日新聞社
- 佐倉市教育委員会編 2004『シンポジウム「井野長割遺跡を考える」』
- 佐倉市教育委員会編 2015『井野長割遺跡国史跡指定10周年記念シンポジウム 縄文時代のムラと盛土』
- 設楽博己 1983「土製耳飾」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣出版
- 菅谷通保 2008「曾谷式・後期安行式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 塚本節也 1989「栃木県 縄文中期中葉について」『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 塚本節也 2008「阿玉台式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 手塚達弥 2004「縄文時代の藤岡」『藤岡町史 通史編 前編』藤岡町
- 中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
- 馬場小室山遺跡研究会編 2007『「環状盛土遺構」研究の現段階』
- 藤沼邦彦・関根達人 2008「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 古谷 渉 2008「粗製土器と精製土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 細谷 勝 1989「埼玉県 縄文中期土器研究の諸問題」『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26、1-19頁



写真1 湧水池と道跡東側を望む



写真2 環状盛土近景



写真3 調査区近景（社の背後が調査区）



写真4 調査区近景



写真5 調査区近景



写真6 A1～A3・A7 グリッド完掘状況



写真7 A1～A3グリッド完掘状況（南西から）



写真8 A7グリッド完掘状況（西から）



写真9 調査風景（A3グリッド付近）



写真10 調査風景（A1・A2グリッド）